



分科会 11 在宅医療に取り組む薬局 ～患者がもう一つの職場～

10月8日(月・祝) 10:30～13:00 第1会場(アクトシティ浜松 B1F 中ホール)

W-11-03

在宅患者に対するHPN調整の取り組み

はぎた ひとし 1,2)
萩田 均司

1) 日本薬剤師会医療保険委員会委員、2) 薬局つばめファーマシー

平成24年診療報酬・介護報酬同時改訂により、医療・介護が在宅医療にウエイトを置き始め、まさに在宅医療元年と位置付けられるようになった。薬局構造設備の基準が緩和され5平方メートル以上必要とされてきた無菌製剤を行うスペース基準が撤廃され、さらに、無菌設備の共同利用も可能となった。このような背景から日本各地でクリーンルームやクリーンベンチを備えた薬局が増加してきた。高齢者人口が増加する中で在宅医療が推進されてきたが、高カロリー輸液(HPN)や無菌製剤が町中の保険薬局で調整可能となると、さらに在宅医療が推進されることになる。一方では、今まで数種類の輸液を混注せざるをえなかったHPNは、キット製剤やプレフィルドシリンジが開発され、HPNの調整がより手軽に行えるようになってきた。そこで、HPN調整の基本と患者での注意点を整理した。〈HPN調整の基本〉1. ビタミンB1欠乏症によるアシドーシスに注意高カロリー輸液療法施行中の患者では、基礎疾患及び合併症に起因するアシドーシスが発現することがあるので、症状があらわれた場合には高カロリー輸液療法を中断し、アルカリ化剤の投与等の処置を行うこととされている。従って、HPNの処方には最低ビタミンB1が処方されている必要がある。2. 輸液のカロリーと投与容量に注意高カロリー輸液療法施行中の患者は、通常の経口摂取よりも少なめのカロリーで充分カロリーが摂取できる。体重をモニターしながらカロリー設定の調整が必要である。また、患者の代謝能力が低下してくると浮腫みや痰の増加につながることもある。全身を観察して水分容量の調整が必要になる。3. 配合変化に注意輸液調剤の基本ではあるが、HPNは基本的に液性が酸性であるのでpHの高い薬品を混注するときは要注意である。4. 患者への運搬～無菌状態の保持～いくらクリーンルームやクリーンベンチでHPNを調剤しても、その後の無菌状態の保持が出来なければ、クリーンルームやクリーンベンチで調剤する意味がなくなる。無菌状態を保持する混注口のシールや無菌パックまたは真空パック等の工夫が必要である。〈患者での注意〉1. ルートの選択HPNが自然落下による投与なのか、輸液ポンプ(カフティポンプ)を使用するのかによって、輸液セットも異なる。自然落下の場合は、点滴台や輸液を吊り下げるフックに工夫が必要である。さらに、患者の体にポートの埋設が行われている場合は、フーバー針が必要になる。留置針を使用する場合は、血液が固まりやすくなるので輸液バッグ交換の前後でフラッシュを行ったり、ヘパリンを使用したりする必要がある。また、感染症を起し易くなることにも注意が必要である。2. 遮光袋HPNに混注しているビタミン類は光の影響を受けやすいので遮光袋を使用する必要がある。3. 医療ゴミについて使用済の輸液バッグや針は、地方自治体の考えによってかなり異なるが、医療廃棄物として処理をする方が望ましい。以上これらの現状を踏まえ、在宅医療においてHPNをどのように調整し、患者ではどのように使用しているか実例を交えて紹介し、HPN調整の意義と今後の在宅医療のあるべき姿を探っていきたい。